



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	es構文の成立に関する研究
Author(s)	荻原, 達夫; OGIWARA, Tatsuo
Citation	独語独文学科研究年報, 21, 15-29
Issue Date	1995-02
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/25993
Type	departmental bulletin paper
File Information	21_P15-29.pdf



0. はじめに

現代ドイツ語には文頭に意味のない形式語 *es* を置き、その他の成分をすべて定動詞の後に配置する構文（以下では単に *es* 構文と呼ぶ）がある。例えば: *Es lag kein medizinischer Befund bei Matthäus vor, der die Teilnahme an diesem Spiel gefährdet hätte.* この構文は統語構造と意味構造の対応関係を明らかにするうえで非常に役に立つ性質をもっているが、¹ 本稿ではこの構文の起源すなわちいかにしてこの構文が成立したかについて考察し、一つの仮説を提出したいと思う。

構成は次のとおり。まず第 1 章で予備的考察として過去の研究者の意見を概観し、それとともに *es* に関するさまざまな現象にも検討を加える。第 2 章は主として英語、オランダ語で対応する構文（*there* 構文、*er* 構文）の諸性質を調べ、それらが何に起因するのを探り、その結果をふまえたうえで、第 3 章で *es* 構文の成立を明らかにする。第 4 章はまとめである。

1. 予備的考察

1. 1 Behaghel (1928) の説と *es* の多様性

この構文はゴート語には現れず、古高ドイツ語でも稀で、12 世紀以降になってよく行われるようになった。したがって、確かな数の資料は中高ドイツ語になってようやく得られることになるが、² 初期の資料には一つの傾向があることを Behaghel (1928) が指摘している (470 頁)。Behaghel によれば、こういう *es* (古形 *ez*, *iz*) の用法はかなりの比率で否定文にともなうものであった。叙事詩 *Rother* では否定文 16 個に対し肯定文はわずかに 1 個、*Rolandslied* では否定文 6、肯定文 2、*Kaiserchronik* では否定文 4、肯定文 1 という数字がそれぞれ得られるからである。³ Behaghel はこの点を考慮に入れ、*es* 構文の生成を次のように推測した。この文の主語 (Behaghel の上掲書では “materielles Subjekt”) はもともと属格だったもので、文中に主格主語を欠いており、そのため、他の非人称動詞 (Impersonalien) と同様に、非人称主語 *es* が現れるようになった (471 頁)。ただし、この説明では *es regnet*, *schneit*, *donnert* など非人称構文の *es* と *es* 構文の *es* が本質的に変わらないことになってしまい、以下に示すような、両者のちがいを示唆する事実が説明しにくくなる。

- ① 非人称構文の *es* がつねに統語的に保たれるのに対し、*es* 構文の *es* は前域以外では許されない。

例えば *Es regnet* → *Regnet es?* に対して *Es kamen viele Leute* → *Kamen viele Leute?*

- ② 非人称構文の *es* は *Ich sehe es regnen* のように *AcI* 構文に生起できるが、*es* 構文の *es* はできない。 *Ich sehe es einige Leute kommen* は不可。

③ 非人称構文の es は不定詞主語を制御できるが、es 構文の es にはできない。⁴ 例: Es blitzt, ohne zu donnern; Es ist warm, ohne zu warm zu sein; Es grünt, ohne schon zu blühen; Es läuft sich gut, ohne besonders angenehm zu sein. (Tomaselli 1986 を参照).

以上のことに加え、一口に非人称の es といっても、その内容は様ではないということを示すデータも存在する。例えば、最後の、いわゆる人称動詞の非人称用法の例はかなり微妙らしく、Es liest sich in der Bibliothek gut, ohne besonders angenehm zu sein では許容度が少し落ちる。また es gibt による存在構文の es の制御能力についても判断が難しい。Tomaselli は es gibt viele Professoren, ohne viele Studenten zu geben という文例を示し、許容されないとはしているものの、全く問題なしとした native speaker も 2 人いたことを注記している。Cardinaletti (1990) ではもっと評価はゆるやかで、Professoren と Studenten を入れかえた Es gibt viele Studenten, ohne viele Professoren zu geben には “??” を、不定詞句を前置した Ohne viele Professoren zu geben, gibt es viele Studenten には “?” を付けているだけである。さらに es gibt + 名詞の対格という形が方言によっては es gibt + 名詞の主格 (geben は主格形と一致 Kongruenz を起こすから、この場合 Es geben viele Nüsse という文も生じうる。相良 1965 を参照) になってしまうことも考え合わせると、いわゆる非人称の es が明確な形を持っているとは言い難い。これらのうちのどれが、あるいはどれとどれが es 構文の形成に貢献したのか。また、上述の制御可能性に関して同じようにふるまう es regnet の es と es ist warm の es も統語的には全く同じとは言えず、Gestern hat es geregnet に対して Mir ist warm となったり、かと思えば Hier ist es warm となるなど違いがある。この場合はおそらく Mir ist warm は心理現象を表現し、Hier ist es warm はその場の状況を描写する (Heidolph et al. 1981: 327 頁を参照。したがって Es ist kalt, aber es ist warm は矛盾だが、Es ist warm, aber mir ist kalt は矛盾ではない) という述語の Semantik が es の Syntax を規定しているのであろう。だとすると regnen 型の動詞の es が常に存在していなければならないという事実は、状況を描写するという regnen 型動詞の意味に還元できるのかもしれない。しかし、このようにいわゆる非人称の es がかなり雑多なものの集まりである一方で、es 構文の es は述語の Semantik にほとんどといってよいほど影響を受けず、⁵ ひたすら統語構造に規定されているという点で、かなり明確な線が両者の間に引けるように思われる。両者は異なる Motivation からそれぞれ成立したのであろう。⁶

1. 2 Grimm (1898) の説と他言語での対応

Grimm (1898) はこの構文の成立を 3 段階に分けて描く (259 頁)。まず最初は、es を置かなかったら主語というものが全くなってしまっていたであろう、そういう文、すなわち主語を unbestimmtes Neutrum と解し、それを補ってもよいような文、典型的には非人称動詞 (unpersönliche

Verben) に es が出現する (ラテン語の fulgurat に対し es blitzt). 次にこれを unbestimmtes Neutrum 以外にも拡大し、男性名詞・女性名詞が主語とされるときにも es が現れるようになる (es spricht der Herr; es rauscht die Welle). そして最後に主語・動詞が複数形の時でも es が文頭に置かれるようになる (es sagen die Leute; es sterben alle Menschen). ただし人称に関しては 3 人称のみ可能で 1 人称・2 人称の前に es が立つことはない旨の制約を述べている. この制約は非常に強力で、3 人称の例ならそれが人称代名詞であっても見かけうるが (例えば Breckenridge の 1975 では Es kam nicht sie, sondern ihre Schwester という例が、また Curme 1952 にも Es kam auch er という例がある. ただしどちらも強いアクセントを置いてという条件がついている), 2 人称の例は Engel (1977) に Es habt ihr euch gemeldet, zwei Hausfrauen und drei Rentner があるだけで、それも Aufzählung として解釈したときのみ許容されるらしく、そういう解釈のない、例えば Es haben wir die Stadt gesehen は認められていない.

この Grimm の説でもっとも興味深いのは単数における es 構文と複数でのその成立が同時ではないと考えていることである. 現代の標準語ではこの構文に関するかぎり定動詞の単複は後方に位置する主語に常に一致するため es の配置はそれとは無関係にしかみえない. しかし Grimm はこう考える: "Die eben nachgewiesene construction des pron. es mit dem pl. des verb. halte ich für entschieden hochdeutsch (260 頁)." そして、その証拠に他の方言 (Mundarten) はこの es + 動詞の複数形という組み合わせを避けている. この形があるとしても、それは "hochdeutscher Einfluß" である. Altsächsisch の it は複数動詞の前には立たないし、Angelsächsisch の hit, 英語の it, オランダ語の het も複数を嫌う. 最後の二言語はその代わり副詞 there, er⁷ が発達し、ドイツ語の es の機能を代行するようになった (there are many books on the table; er moeten nog veel mensen komen). 同じような意味・機能をもつ構文が、ある言語では三人称単数中性の人称代名詞によって、別の言語では場所を表す副詞に導かれるようになったのは、動詞の複数形の前に単数の人称代名詞を立てることができるかどうかということと関係がありそうだが、これについては 2. 3 で詳しく述べる.

ロマンス語でも複数動詞は避けられているが (このことがはっきりわかるのは非 pro-drop 言語のフランス語である), ここでは副詞を使う代わりに動詞のほうを単数にしようということがおこる (trois filles sont arrivées に対して il est arrivé trois filles).

いずれにしても、動詞の複数形の前に es (もしくは各言語でそれに対応する語) を置くことになったとき、①そのまま置いてしまう、②他の品詞を援用する、③逆に動詞を es に合わせてしまう、など各言語の対応の仕方は様々である. なぜこうなっているのかについては第 2 章で考える.

1. 3 Dal (1966), 相良 (1941) の説と “Platzhalter-es”

Dal (1966) および相良 (1941) では、この es は後方の主語と anaphorisch な関係にあったとされている。そして Dal によれば、このような es の用法は “die weite Beziehungsfähigkeit des Neutrums” に起因し (Dal 1966: 77 頁), それが後に Beziehungsfähigkeit を失い、単なる形式語になってしまったものである。相良の考えもこれに近いが、その主張はもっと具体的だ。すなわち「元來この種の es は意味の上からも完全な語であつたもので普通意味上の主語若しくは眞實の主語 ... と呼ばれるものは es の内容を更に明確にするための同格語 (Apposition) であつたと思われる」(33 頁)。つまりこの構文生成の背後に Sie geht wieder, meine Uhr のような構造をみているわけである (同頁)。

この説明は上述の Behaghel や Grimm の発想を逆にしたものと言えなくもない。Behaghel, Grimm においては、この es は非人称の es、つまり同格語を置くことのできない、内容の不明確な語が拡大された用法とされているのに対し、Dal, 相良ではもともと「完全な語」としての es が仮定されている。どちらが正しい説なのか、簡単に判断は下せないけれども、すでに述べたようにゴート語および古高ドイツ語での出現数の少なさを顧慮すると Behaghel/Grimm 説のほうが説得力をもつと言えるかもしれない。ゴート語にせよ古高ドイツ語にせよ動詞の変化語尾がかなり豊かであったこと、定動詞第 1 位がまだ珍しくなかったことがこの es の出現を不要にしていたと解釈すれば (この解釈は不自然ではないと思う。以下の議論も参照。ただし Ebert 1978 の 51 頁から 53 頁も参照されたい)、es の登場は (動詞のいわゆる gedeckte Spitzenstellung も含めて) morphosyntaktisch な要因とかなりの程度関連していたはずであり、中高から新高ドイツ語にかけて、この構文が “außerordentlich (Dal 1966: 77 頁)” に広まる (ただし Grimm のいう “hochdeutscher Einfluß” もあって) のは不定語 es とその意味内容を後ろから説明する同格語という形とはあまり関係がないように思えるのである。初期の文例に否定文が多いという事実もこの形とどう絡んでくるのかもはっきりしない。英語やオランダ語が人称代名詞を捨てて副詞を使うようになったこともここからはでてこないのではないか。いずれにしてもこの構文の成立に関するかぎり、Sie geht wieder, meine Uhr あるいは Es ist richtig, was du gesagt hast と同列に並べることは説明としてはわかりやすいかもしれないが、不明な点も多いのである。特に Es ist richtig, daß ... のタイプの es は英語でもオランダ語でもそれぞれ it, het で対応し (it is difficult that...; het is moeilijk dat...), 決して there や er にならないことも es 構文の es と daß-Satz 等を指す es とのちがいを示していると思う。

Heidolph et al. (1981) も前者を Thema-es もしくは thematisches es, 後者を Platzhalter-es と呼び別々に取り扱っている。この Platzhalter-es は定動詞倒置の際にも現れるから (Deshalb ist es möglich, daß wir warten müssen; Deshalb wäre es feige, nicht hinzugehen), 統語的に

も es 構文の es とは異なるものである。それに Eisenberg (1986: 206 頁) も指摘しているように機能的にも同一とはいえない。つまり es 構文は後方の主語を rhematisieren するが, Heidolph et al. の意味での Platzhalter-es 構文 (Extraposition) はふつう後方の外置文や zu 不定詞を rhematisieren しない。したがって Es wird ein Gewitter nahen; Es grüßt dich dein Paul; Es bediente sie Herr Schulz などではそれぞれ ein Gewitter, dein Paul, Herr Schulz が伝達の中心にくるが、これに対し Es begeistert ihn, daß wir mitmachen; Es nervt sie, mich anzuhören では Hauptakzent は begeistert, nervt に置かれ、後置された要素は伝達の中心にない。⁸ 結局 es 構文と外置構文は統語的にも機能的にも別の構文なのである。この両者がもともと同一でそれぞれ違う方向に機能的に進化したと考える十分な根拠も存在していない。

外置文に近い例ではいわゆる分裂文があるが、これも es 構文の主語になりにくい名詞句 (例えば人称代名詞) が焦点に現れることができ (例えば Auch in der Kammer war es noch er, der den Riegel verschob. [Musil. Erben 1972: 214 頁より]), 機能的に相補うかのような感じがなければいけない。だから es 構文の主語が代名詞の場合機能的にこの両者はかなり近くなる (Es ist dies das beste Resultat, das wir je hatten. [Putz 1986]; Es lag das in der Natur des Pfarrers, der die Welt Dinge nicht verstand, und dreimal beraubt werden mußte, bis er das ersparte Geld auf Zinsen anlegte. [Stifter])。しかしながら es の統語上の地位は一致しない。分裂文の es は削除できないため、というよりも分裂文の表現の一部になりきっているため、きわめて堅固である。したがって、英語やフランス語の強調構文 (it is ... who; c'est ... qui) のことも考え合わせると、この両者も見かけ上の類似物にすぎないといえよう。

2. es 構文と他言語での対応物

2. 1 there 構文 (英語)

A. E. Hammer の German Grammar and Usage では some special uses of 'es' として es 構文も触れられていて (77 頁), Es saß eine alte Frau am Fenster; Es erhoben sich die Anwesenden; Es stieg ein kalter Nebel という文例が挙げられている。そしてそれぞれに対応する英語の文は次のようになっている: There was an old woman sitting at the window; Those present rose to their feet; There was a cold mist rising. 最初と最後は there を使っているが 2 番目の文は別の形をとっている。英語が it を捨てて there を利用するようになり、いわゆる there 構文が形成されるようになったということはすでに述べたが、ここからわかるように、その使用に関する制約は対応するドイツ語の es 構文に比べてかなりきつい。何よりもまず、述語が一部のものに限られるし、⁹ 主語も強い定性効果をひきおこす。¹⁰ しかしながら there の統語的地位はきわめてしっかりしている。さまざまな統語操作においても常に保たれており、ドイツ語の es が踏み込めない環境にお

いても何の影響も受けない。¹¹ 動詞と一致する (There seems to be a unicorn in the garden; There seem to be many unicorns in the garden) など、統語上は名詞にきわめて近い機能をもっているともみなすこともでき、there 構文はいわばせまく深く発達していると言えるだろう。

2. 2 er 構文 (オランダ語)

一方英語と同様に代名詞 *het* を放棄し、副詞 *er* を転用するようになったオランダ語はどうだろうか。定性効果は英語ドイツ語と同じく観察され、*Er loopt een jongen in de tuin* は問題ないが *Er loopt de jongen in de tuin* においては許容度が低下する。これはフランス語においても言えることで (*Il est arrivé les filles* は受け入れられない)、こういった構文に広く共通する性格である。さて、英語と同じ方法をとったオランダ語の *er* はやはり英語と同じく、そしてドイツ語と違って、文頭に限られるということはない: *Zij zegt dat er iemand geslagen wordt*。しかしながら *er* 構文は英語よりも使用範囲が広くとれる: *Er werkt een jongen; hij zegt dat er niemand een olifant gezien heeft* など。ところが *er* 構文にはおもしろい制約があることを Bennis (1986) が指摘している。上述のように、主語の定性が文の作りの良さに影響を及ぼすのはこの構文全般の特徴なのであるが、Bennis によるとオランダ語のこの構文は主語だけでなく目的語の定性も無視できないらしい。すなわち *Er loopt een jongen* は可だが *Er loopt de jongen* は不可、という通常の制限のほかに、目的語も不定名詞句に限られるようで *Er heeft niemand iets gekocht* は言えても *Er heeft niemand het gekocht* は言いにくいようなのである。さらにふつうの目的語ばかりでなく前置詞格目的語も定性の低さを求められる: *Hij zegt dat er niemand op een cadeau rekende* の *op een cadeau* を *daar op* とすると文のすわりが悪くなる。これらの事実から、結局 Bennis は次のように述べ、これを語用論上の問題として処理しようとする。"sentences must at least have one constituent in presupposition. If no constituent qualifies as presuppositional, expletive *er* must be inserted (222 頁)." そしてこのアイディアは最終的に "Empty Presupposition Condition (EPC)" という形で定式化され、実際 *er* 構文に関する制約をうまく説明する。ところがこれはドイツ語の *es* 構文にはあてはまらない。例えば *Es stieß ihn ein Soldat von der Brücke*。すなわちドイツ語では EPC は成立しない。かといってこれとは別に Bennis が論じている *het* の分析にもしたがない。¹² 苦心の末、この *es* は [+θ, ±C] の NP、つまり主題役割をもち、格に関しては中立な名詞句であるとし、前域 (Bennis 1986 では "Topic position") には "(adjunct) thematic role (311 頁)" が与えられるとしているが、この説明はどうみても *ad hoc* であり、説得力に乏しいと言わざるをえない。また先にみた *regnen* 型動詞の *es* のように何らかの働きを示す (たとえば不定詞主語の制御) のならまだしも、そもそもそういった機能すらもたない *es* 構文の *es* に主題役割を設定するのは無理であろう。これは主題関係 thematic relation から生じる要素ではない

と考えたほうが良いと思う。

2. 3 統語構造からの説明: IP 型言語と CP 型言語

Grimm の説によれば動詞の単数形の前に es (および各言語でのその対応物) が立つところまでは各言語間で大きな差はなかったことになり、動詞複数形がきたときどうするかで言語は別々の道を歩むことになる。英語、ドイツ語、オランダ語に関していえば、まずそのまま es を使い続けたドイツ語 (より正確には es を使い続けた Hochdeutsch の影響下で生じた現代の標準ドイツ語)、es をやめ、副詞を使うようになった英語・オランダ語という対立が描ける。さらに同じ副詞を用いる英語・オランダ語間でもその性質にちがいが生じる。概していえば英語の副詞 there は統語的にみて名詞に近く、オランダ語の er は名詞というより文の語用論的構造を調整する Partikel といったほうが近い。これらの差はどこから生じたのであろうか。

先のフランス語の例にもどって Il est arrivé trois filles をみみると Il sont arrivées trois filles とはならず動詞が単数の代名詞 il にあわせた格好になっている。英語に置きかえればこれはさしずめ It are four apples on the desk を It is four apples on the desk と直したことに等しいが、実際はこうはならず動詞の複数形を優先し it を there にして There are four apples on the desk となる。つまり il sont, it are のごとき形が生じるのをどちらの言語も避けようとしたわけであり、動詞の数 (Numerus) のほうを変えて平仄を合わせるか、あるいは数に関して中立な there を代入するかして阻止してきたのである。これは何を意味するのか。

一つの文を全体としてみれば il sont も it are も重大な問題にはならない。なぜなら sont, are と一致する「主語」は文のどこか後ろのほうに必ず存在しているからである。ドイツ語で考えてみれば es sind の形が不都合とならないのは必ずその後複数の主語が登場するからであるということがわかる。したがって holistisch なことが原因なのではない。だとすると il と sont あるいは it と are の間にある局所関係が原因だと考えるしかない。では il と sont, it と are の間にある局所関係とは一体何か。それは主語と動詞の一致 Kongruenz にほかならない。しかし一致ならドイツ語にもある。したがってここで問題になるのは、一致の有無ではなくて、一致の仕方である。

Chomsky (1986) に示されるような統語構造を仮定すると、英語もフランス語も表層で主語と定動詞がそれぞれ IP の specifier と IP の head の間に位置している。¹³ いわば IP 型言語である。これに対しドイツ語は Thiersch (1978) 以来仮定されているように、派生は IP で終了せず CP までつづく。これを CP 型言語としよう。主語と動詞の数の一致は原則として IP でおこるものと考え、IP 型言語の英語・フランス語の there, il は動詞と一致しなければならない配置にあることになる。一致の具体的なメカニズムがどういうものになるにせよ、IP で一致が確認されなければ不適格な構成物が派生してしまうが、IP 型言語である英語、フランス語はこの不自然な一致をこのま

までは回避することができない。そこで動詞の数 (Numerus) を変えたり、人称代名詞を副詞に置きかえたりという非常手段に訴えたわけなのである。いいかえれば IP 型言語においては *il sont* や *it are* は構造的に許されない形だったがゆえに *il est*, *there are* が発生したのである。また IP の specifier が *il*, *there* に構造的に占められてしまうから他動詞の主語, intransitive (つまり非 ergative) 動詞の主語は現れることができず、これがひいては *il*, *there* 構文の述語に関する制約となって表面にでてくるのである (*There telephoned a man* も *Il a téléphoné trois amis* も不可.)。

これに対し CP 型言語のドイツ語ではこういう問題は原理的に生じない。文中で第 2 位に位置する定動詞は構造上は IP ではなく CP の head であるから、この動詞の前に現れる *es* に煩わされるということはない。数の一致は CP の head と specifier の間ではおこらないからである。一致は他のところで確認するから *es* と動詞の複数形が並んでいてもなんともない。構造的な規制がないから制約もきわめてゆるい。

ところが、このままではオランダ語の *er* 構文の問題が残ってしまう。オランダ語はドイツ語と同じく CP 型言語であるから何もわざわざ *er* を使うまでもない、*het* のままでよいはずだ。ところがそうはなっていない。おそらくこれは、オランダ語の内部で *het* の機能が referential pronoun (Bennis 1986) としての機能に限定されたこと、多岐にわたる *er* の機能 (Donaldson 1987/Bennis 1986 ではそれぞれ repletive/expletive, partitive/quantitative, pronominal/prepositional, locative/locative があげられている) のなかにドイツ語の *es* 構文の機能をほぼ再現するもの (repletive/expletive *er*, ただし機能的に完全に一致するわけではない) があること、先に述べた EPC が *het* ではなく *er* の使用とむすびついているなどの原因が重なって結果的に *er* 構文を生じさせたのであろう。*er* が *there* とちがって統語的に名詞化しないのは EPC という語用論的条件に規制されているからであり、また *there* 構文よりも広い範囲で使えるのは CP 型言語だから、ということになる。

3. *es* 構文の成立

3. 1 VP と意味解釈原理

さて、ドイツ語の *es* 構文の生成について以上のことから何がいえようか。

es を文頭に置くことと直接関連しておこる統語現象は主語が VP 内に置かれることだけである (荻原 1993 を参照)。統語領域 VP は一定の意味解釈原理とむすびついた領域であり、ここから主語の定性効果が生じる。この意味解釈原理は概ね「解釈は文の内部の情報をもとにおこなえ」とでもいえるもので、文の外部の情報が解釈の際どうしても必要な代名詞、定名詞句などはこの原理に違反するから、これが表面にでて定性効果となるのである。また *nichts*, *etwas*, *viel*, *wenig*, *kein* + 名詞

などの表現がこの構文と相性が良いこともここからでてくる。主語が後ろのほうに行くのは VP のなにかにあるからである。ただし、詳しくは萩原（1993）をみていただきたいが、この原理に違反するものでも、強勢を置くことでこの違反を取り消すことができる：es irrt auch ér. したがって基本的に条件さえ揃えれば何でも可能なわけで英語、オランダ語、フランス語に存在する上述のような制約は無効だといってもよい。しかしながら非常にきびしい条件が一つだけある。Grimm がすでに気づいていたように主語が 1 人称、2 人称のときはこの構文は不可能である。特に強勢を置くということは統語的には LF 移動につながりうるから es irrt [ér] ([] は VP を示す) から、たとえば es irrt er_i [t_i] のような構造が派生され、その結果、非合法的な要素が VP 内になくなり、この文は許容される。しかしながら、この過程には人称による差は存在していないから、人称に関する制約はここからはでてこない。あるいは ich, du, wir, ihr, Sie は VP の意味解釈原理にしたがって解釈できるともできないとも考えられ（1 人称、2 人称はだれを指しているか明らかでもあるともいえるし、その一方で文脈つまり文の外部の情報から離れては解釈できないともいえる）、この原理に直接訴えることはあまり意味がない。

3. 2 客観的描写, gedeckte Spitzenstellung

というより、この原理は基本的に客観的判断とでもいうべき前提を必要とするのであろう。1 人称、2 人称は客観的判断に馴染まないがためにこの原理では捌けないというわけである。非人称受動にこの構文の es と同じ分布を示す es ができることを考え合わせると、この es をもつ文は基本的に出来事全体を客観的に描写したいときに用いられるのだといえよう。ここで Curme (1952: 461 頁) に引用されている Heinrich Winkler の文章をみてみよう：

Kommt da plötzlich ein Kerl herein, hat einen Revolver in der Hand, schießt den N. nieder; glaubt doch alles, es handle sich um persönliche Feindschaft usw.

これはまさに出来事（の流れ）を客観的に描いている文章である。それから、

Zwei Dinosaurier treffen sich. Sagt der eine: "Kannst du mir sagen, wie spät es ist?"

"Nein, keine Ahnung." "Und du willst ein Ur-Tier sein?!"

あるいは

Fragt der kleine Dinosaurier seine Mutter. "Wenn ich mal tot bin, komme ich dann in den Himmel?" "Nein", antwortet die Mutter, "ins Museum."

など Witz によくできる言い回し Sagt der eine ..., Fragt einer かどうか。これも状況を客観的に淡々と述べることで Witz の効果を高めてようとしているのではないか。定動詞第 1 位の構文は典型的には決定疑問文であるが、これらの文に疑問文としての解釈は入る余地がない。es 構文の起源はこういう定動詞第 1 位の文を es で decken したものだっただけにちがいない。だから es の生起が

結果的に定動詞第 2 位に支えられているのは至極当然のことといえよう。ではなぜ es で decken しなければならなかったのか。それは平叙文において定動詞第 2 位が多く用いられるようになったこともさることながら、おそらく次の文に示されるような感情的・主観的な文でも定動詞第 1 位がおこなわれたため、それと区別しようという意識が働いたためだろう：

Hab' ich den Markt und die Straßen doch nie so einsam gesehen! (Goethe);

Gehe ich doch gestern die Hauptstraße entlang und treffe meinen alten Lehrer.

上述の Winkler の文には es をつけてもおかしくないが、これらの文に es をつけるのは不自然である。また、客観的ということからいえば、この構文に現れやすい述語というものがあってもおかしくない。Breckenridge が述べたごとく文を作ってみればたいていの述語が可能ではあるが、私の収集した文例にかぎっていえば 125 個の文のうちもっとも多かったのは bleiben と fehlen でともに 8 個、以下 liegen 6 個、bestehen 6 個、folgen 6 個、beginnen 4 個、entstehen 4 個... と続く。VP の意味解釈原理と客観的描写という機能を考えればこの結果はごく自然なのではないだろうか。また、再帰動詞、能格動詞、動詞受動態を合わせると 64 個 (51.2 %) でこれは全体の半数を上回っているが、これも驚くべきことではないはずだ。なお Behaghel が確認した否定文の比率の多さだが、この比率そのものを直接説明するのは難しい。しかしながら、現代語においても否定文の比率は決して高くはないが、かといって低いとも言えないので (否定文は 28 個でその比率は 22.4 % である)、この構文の客観的に描写するという機能はもともと否定文と相性は良いのだということは少なくとも言える。Behaghel のあげた数字はこの構文にたまたま否定文に集中した結果なのかもしれないし、あるいは es による gedeckte Spitzenstellung をとくに必要とする何かが否定文にあったのかもしれない。Rother の数字は極端だが、それ以外は偶然といってもよいかもしれず、原理的な考察にはそもそも適していないのではないかという疑問が残る。

3.3 語用論的機能、イントネーション、意味解釈

残る問題はなぜ es なのかということであるが、これは gedeckte Spitzenstellung をおこなうために「軽い」語、すなわち強勢を有しない語でかつ意味的に leer な語として es が最適であったためというのが答えであろう。上に示したように現代語でも Spitzenstellung をもって es 構文と同じ機能をはたすことが可能であることからわかるように、es 構文は es をつけることが即この構文の機能につながっているわけではなく、上述の機能をはたしうる動詞第 1 位の文があってはじめて es をつけることができたのである。だから Herder の Es sah ein Knab' ein Röslein stehn が韻律の都合で Sah ein Knab' ein Röslein stehn (Goethe) となったりするのも不思議なことではない。また、gedeckte Spitzenstellung ということでいえば es の代わりに da を同じように用いることもできようが (例えば Jung 1971: 337 頁を参照)、da は英語の there、オランダ語の er などと違っ

て形式語としては発達していないから es と同列に論じるべきではない。たとえば da kommt er は全く問題ないが es kommt er は良い作りの文とは言えないだろう。da と es があまり変わりなく用いられるような気がするとしても、それは大きな文脈の中に入れてみたときに両者の差がわかりにくくなるからなのである。

客観的に描写するといってもそのことで es 構文の語用論的な働きが限定されるわけではない。Pütz (1986) や Lenerz (1985) のようにこの構文を Aussagesatz と一意的にむすびつけるのはややせますぎる解釈で Cardinaletti (1990) も述べているように Es kamen viele Gäste?; Es hat jemand wen angerufen?; Ich glaube, es sind viele Briefe da からわかるごとくその illocutionary force はこの構文の機能と一意的にむすびついているわけではない。ただし実例を探すと Aussagesatz が多いというのも事実ではある。

イントネーションに関しても gedeckte Spitzenstellung をもとに考えると都合のよい場合がある。たとえば Es lebte einmal ein König は Pütz のよれば Primärakzent は ein König に, Sekundärakzent は lebte にくる。einmal は tonlos である。ところがこれを Einmal lebte ein König とすると einmal はもはや tonlos ではなくて、ここに Sekundärakzent が置かれ、意味が変わり Einmal lebte ein König, ein anderes Mal lebte ein Kaiser im Lande Bayern という文脈に現れるような文になってしまう。あるいは Ein König lebte einmal も es 構文とは異なるイントネーション、異なる意味をもつようになる。つまりこの場合 lebte einmal ein König という Spitzenstellung を考えて、このときのイントネーション (Primärakzent: ein König; Sekundärakzent: lebte) を保ったまま定動詞第 2 位をつくりだす配置が他になければ es で decken するしかない。その結果が Es lebte einmal ein König というわけである。もちろん Es kam ein Brief an と Ein Brief kam an はどちらも同じ強勢の置き方をするから意味変化をとまわずに es 構文と交代する例もあるわけで、すべてに関して es の Deckung が obligatorisch というわけではない。むしろ意味変化をとまわらないほうが多いとさえいえるだろう。したがって Es lebte einmal ein König に関する上の議論はそのままでは一般化できない。ただ Einmal lebte ein König で einmal と ein König の両方に強勢をおくと generisch な解釈 (Könige lebten immer nur einmal) が生じることから、これは量子子の存在に影響を受ける現象なのかもしれない。もちろん es 構文が generisch な言述と馴染まないわけではないことは次の例からわかる: Es ist ein Sieg auch zugleich immer eine kleine Niederlage (Pütz 1986); Es füttern sich Löwen nicht ohne Risiko (Abraham 1993).¹⁴

4. まとめ

本稿で取り上げたのは es 構文の起源あるいはその成立に関与する諸々の現象である。それらを分析することにより明らかになったのは、ドイツ語の es 構文とそれ以外の言語での対応物は統語構造

的制約 (IP 型言語 vs. CP 型言語) あるいは語用論的条件 (EPC) がもとでそれぞれややちがう趣をもつ構文へと発達していったこと, es 構文は客観的描写をする動詞第 1 位の文を形式語 es で decken したものであるということである。

注

1. 荻原 (1993) および第 3 章を参照されたい。
2. Behaghel (1928) は 12 世紀, Dal (1966) は中高ドイツ語から現れると述べている。Grimm (1898) には古高ドイツ語の文例もあげられている。
3. ただし Behaghel はまた Nibelungenlied ではこのような大きな差は認められず, ez wuohs in Burgonden ein vil edel magedin [2, 1]; ez fuorten scharpfe gëren die ritter us erkorn [73, 2]; ez sint in mine hûse unkunde degene, die niemen hie bekennet [83, 2f]; ez stuonden vor dem berge die Kriemhilde man, und ouch ein teil ir mäge [1121, 1f] のように肯定文の例を見つけることがむずかしくないことも観察している (文例出典は Fischer Taschenbuch の Das Nibelungenlied. 1. Teil)。
4. regnen 型動詞の es (it) を Chomsky (1981) は “quasi-argument” と呼んで純粋な non-argument である expletive (there) と区別している。
5. Breckenridge (1975) は “I couldn’t find any predicate which blocked es-Insertion” と言っているほどである (84 頁)。ただし Koya (1992) によれば es ist ein Mann Lehrer; es sind einige Frauen schön は不可とされている。Koya は Breckenridge に言及していないので Breckenridge の記述を Koya がどうみているのかは不明であるが, Breckenridge は es werden fünf Fragen schwer sein という文も例として挙げているから述語形容詞の Semantik と文の許容度が大きく関係しているとは思えない。結局 Koya は “It is however not clear in which constructions the “disappearing” es occur” と述べており, この es 構文を扱いかねている。ただ私見では Koya のような見解よりも Breckenridge のような見解が一般的なような気がする。しかしながら, そもそもこの es がどんな述語と結びつきにくいのかという面での研究は, 私の知るかぎり, ほとんどないというのが現状である。
6. なお Renicke (1961:168f) は 動詞 frieren の用法に関連して Ich friere は “betroffene Grundgröße” および “Aussagegröße” から, Mich friert は “vollführende Beziehungsgröße” および “Aussagegröße” から, Es friert mich は “vollführende Beziehungsgröße” および “Aussagesphäre” からそれぞれなるとし, この “situierendes es” は定動詞と緊密に結びつき, これを “sphärisch” に拡大するという考えを展開, es 構文の es もこの es であるとしているが, Es friert mich の es は上述のように述語の意味に規定されている可能性があるから両者を

同一視するのは統語的にも意味的にも疑問である。それに *ich friere* は aktueller Zustand も relativ dauernde Lage も表すが *Mich friert (es)* は aktueller Zustand しか表さない (Heidolph et al. 1981: 328 頁を参照) という意味的ちがいが “betroffene Grundgröße,” “vollführende Beziehungsgröße” といった対立からどのようにでてくるのかも明らかでない。また *Mich friert es* をどう処理するのも問われることになる。

7. Donaldson (1987) では repletive er, Bennis (1986) では existential/expletive er と呼ばれている。
8. ただ、これには例外があって *Immer begeistert es ihn, daß wir mitmachen; Eigenartigerweise nervt es sie, mich anzuhören* のように定動詞倒置を行ったとき、これらの *es* は落ちないが *Heute zeigt es sich, daß das ein Fehler war* の *es* は取り去ることができ (*Heute zeigt sich, daß das ein Fehler war*)、そのとき後置文の Rhema 化がおこるのである。任意の *es* の有無ともなって伝達の中心が変わってくるわけだが、この場合はむしろ再帰構文が受動的意味を帯び、主語文というより目的語文に近くなっているがために (例えば *Seine Antwort zeigt deutlich, daß das ein Fehler war* という文と比較されたい) 後置文が意味の中心になるのであろう。逆に *es* を入れたことで後置文の脱 Rhema 化がおこっている例と解したほうがよいと思う。また Curme (1952: 461 頁) の *Es ist eine der hauptsächlichsten Eigentümlichkeiten, die ihn von Alexander, Hannibal und Napoleon unterscheidet, daß in ihm nicht der Offizier, sondern der Demagog der Ausgangspunkt der politischen Tätigkeit war* で後置文に emphasis がくるのも *sein* が述語になっているためであろう。
9. *be* 動詞、いわゆる能格動詞など。 *There was a unicorn in the room* はよいが *There walked a unicorn into the room* は許されにくい。さらに述語の意味的性質も関係してくる: *There were several students ill* は可能だが *ill* をたとえば *tall* に置きかえると許容されない。
10. 全称量化子 universal quantifier は全くといってよいほど使えない。 *There are all dogs in the garden* も *there's every dog in the room* も不可。ただし一定の条件下で英語もドイツ語も定性効果が消失することはある。それがどういう条件なのかについては Holmback (1984) および 荻原 (1993) を参照されたい。ただそのことを考慮に入れたとしても、やはり英語のほうが制約がきついという印象は否めない。
11. *They believed there to be unicorn in the garden* なども可能。受動化して *There was believed to be a unicorn in the garden* のような文を作ることも不可能ではない。1. 1 も参照。
12. ただし *es* 構文以外の *es* の分布は Bennis の分析するとおりになっている。ここでもまた *es* 構文の *es* とそれ以外の *es* のちがいが認められる: “It then follows that the analysis which was developed for Dutch het is able to account for the complete distribution of

German es, with the exception of the occurrence of es in first position in (80) [= es 構文の es のこと] (310 頁).”

13. 詳しくは Pollock (1989), Chomsky (1989), その後の理論的進展を取り入れたさらに細かい分析については Chomsky (1992)などを参照されたい。ただし以下の議論はこれらの論文で仮定されている構造をそのままの形では用いず、最低限必要な部分以外はかなりの簡略化を行っている。また厳密に言えば、英語の主語はつねに IP の specifier にあるけれども、動詞は助動詞以外は VP 内に留まっているから、以下の議論は LF での配置に関するものになる。しかし本稿に関するかぎり、これは大きな問題ではない。
14. ただし、これら generisch な言明を行う es 構文は、統語構造がわずかにことなっている可能性がある。副詞句の位置から推定するに、主語はの場合おそらく動詞句内に位置していない。ふつうの es 構文とちがって客観的・知覚的判断よりも経験的判断に近づくこれらの例は、全く別の分析を要するのかもしれない。これに関しては稿を改めて論じることにした。

文献

- Abraham, W. (1993): "Null subjects in the history of German: From IP to CP" in: Lingua 89, 117-142.
- Behaghel, O. (1928): Deutsche Syntax. Eine geschichtliche Darstellung. Bd. III Die Satzgebilde. Heidelberg.
- Bennis, H. (1986): Gaps and Dummies. Dordrecht.
- Breckenridge, J. (1975): "The post-cyclicity of es-insertion in German" in: Grossman, E. R., L. J. San, T. J. Vance (eds.): Papers from the Eleventh Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society. 81-91.
- Cardinaletti, A. (1990): "Es, pro, and sentential arguments in German" in: LB 126, 135-170.
- Chomsky, N. (1981): Lectures on Government and Binding. Dordrecht.
 (1986): Barriers. Cambridge, Mass.
 (1989): "Some Notes on Economy of Derivation and Representation." Ms. MIT.
 (1992): A Minimalist Program for Linguistic Theory. Ms. MIT.
- Curme, G. O. (1952²): A Grammar of the German Language. New York.
- Dal, I. (1966): Kurze deutsche Syntax. Auf historischer Grundlage. Tübingen.
- Donaldson, B. C. (1987): Dutch Reference Grammar. Leiden.
- Ebert, R. P. (1978): Historische Syntax des Deutschen. Stuttgart.
- Eisenberg, P. (1986): Grundriß der deutschen Grammatik. Stuttgart.

- Engel, U. (1977): Syntax der deutschen Gegenwartssprache. Berlin.
- Erben, J. (1972): Deutsche Grammatik. Ein Abriß. München.
- Grimm, J. (1898): Deutsche Grammatik. Vierter Theil. Gütersloh.
- Hammer, A. E. (1971): German Grammar and Usage. London.
- Heidolph, K. E., W. Flämig, W. Motsch (1981): Grundzüge einer deutschen Grammatik. Berlin.
- Holmback, H. (1984): "An Interpretive Solution to the Definiteness Effect Problem." in: LA 13. 195-215.
- Jung, W. (1966): Grammatik der deutschen Sprache. Leipzig.
- Koya, I. (1992): Subjecthood and Related Notions. A Comparative Study of English, German and Japanese. Basel/Boston/Berlin.
- Lenerz, J. (1985): "Zur Theorie syntaktischen Wandels: das expletive es in der Geschichte des Deutschen" in: Abraham, W. (hrsg.) Erklärende Syntax des Deutschen. Tübingen. 99-136.
- 荻原達夫 (1993): 『es-動詞-主語構文の統語構造と意味構造』独語独文科研究年報 20. 北海道大学. 249-265.
- Pollock, J.-Y. (1989): "Verb Movement, Universal Grammar, and the Structure of IP" in: LI 20. 365-424.
- Putz, H. (1986²): Über die Syntax der Pronominalform "es" im modernen Deutsch. Tübingen.
- Renicke, H. (1961): Grundlegung der neuhochdeutschen Grammatik: Zeitlichkeit - Wort und Satz. Berlin.
- 相良守峯 (1941): ドイツ文章論. 歴史的・心理的把握. 岩波書店.
- (1965): ドイツ語学概論. 博友社.
- Thiersch, C. (1978): Topics in German Syntax. MIT. Diss.
- Tomaselli, A. (1986): "Das unpersönliche "es" -- Eine Analyse im Rahmen der Generativen Grammatik" in: LB 102. 171-190.